

くらやみの谷の小人たち

いぬいとみこ 作 吉井 忠 画



くらやみの谷の小人たち

いぬいとみこ 作

吉井 忠画

福音館書店 発行



くらやみの谷の小人たち

©一九七二年六月二五日 初版発行

一九七四年九月三〇日 第五刷発行

著者 いぬいとみこ

行 福音館書店

郵便番号一〇一

東京都千代田区三崎町一丁目一番九号

電話(〇三)二九二一三四〇一

振替東京一一七六四五

製印

刷 精興社

本 黒岩大光堂

・無理な扱いをしないのに、お買い上げ後一週間以内に
こわれたような本がございましたら、お買い上げ月日、
書店名をご明記の上、おそれいりますが、本社にご返
送ください。責任をもっておとりかえいたします。
・NDC/九一三/四二四ページ/二一センチ

「木かげの家」と小人たち

むかし——明治時代めいじじだいの中ごろに、イギリス生まれのふたりの小人が日本へわたってきて、人に知られず住んでいました。そして大正時代たいしょうじだいのはじめごろ、その小人たちは、ケヤキの木こかげに建たっている森山家にあずけられました。空いろのふしぎなコップといっしょに。

「木かげの家」とよばれた森山家の代々だいでいの子どもたちは、のちに四人家族かぞくになったこの小人たちに、空いろのコップで毎日ミルクを運ぶ役目をはたしながら、つぎつぎに大きくなってゆきました。森山家のいまの主人になった父親ちちおの達夫たつおも、そのいとこで、のちにみな母親ははとなった透子とほこも、そしてその子どもたちである、哲てつ、信しん、ゆりの三人きょうだいも……。

ところが昭和のはじめごろ、日本は中国で戦争せんそうをはじめました。その戦争はしだいに大きくなって、いまから三十年ほどまえ、イギリスやアメリカとも日本は戦たたかいはじめたのです。森山家の書庫しょこのおくで、ひっそり暮くらしてきたイギリス生まれの小人たちが、日本の土地で生きてゆくことは、このころから、だんだんむずかしくなってきました。

そのころ小人たちにミルクを運ぶ役目をひきうけていたのは、森山家の末っ子すえこのゆりでした。

父の達夫は戦争に協力しない「非国民」として警察につれてゆかれ、帰ってきませんでした。戦争に反対することはもちろん、戦争に疑問をもつことさえ、ゆるされていなかったのです。

小さい兄の信は、そのころの十代の少年たちがみなそうだったように、「愛国」の気もちと「敵」を憎む心を純粋なたましいの中にふきこまれて、「非国民」の父や、イギリス生まれの小人たちを、はげしく憎みはじめていました。

そうした中で、ゆりは毎日ミルクを入れて運ぶ空いろのコップのふしぎな光にはげまされながら、四人の小人のいのちを守ってゆこうと、ひとりで決心していたのです。

空襲が日ましにひどくなり、都会から子どもという子どもが、田舎へ「疎開」をしなければならなくなったとき、三年生のゆりは大きい兄の哲に手つだってもらって、四人の小人たちと空いろのコップといっしょに、信州の野尻のとおばさんの家へ移ってゆきました。小人のロビンの友だちのハトの弥平も、東京からはるばるやってきました。

ゆりにもハトの弥平にも、世の中のことはよくわかりませんでした。でもながくつづいた戦争のために、じぶんたちや小人たちのたべものが日ごとにとぼしくなってゆくことだけは、わかりました。

ゆりといっしょに信州に移ってきた小人のアイリスとロビンには、新しい友だちができました。何でも人のいうことに反対してみせる野育ちの小人アマネジャキは、小人のロビンとはじ

めあまり仲がよくなかったのですが、のちにゆりがミルクを手に入れることができなくなって、四人の小人のいのちがあやぶまれたとき、このアマネジャキがふいにあらわれて、小人たちの危機をすくいました。

一九四五年八月十五日、ゆりは日本がいくさにまけたことを、とよおばさんの家で知りました。東京の「木かげの家」は、空襲で焼けてなくなっていました。ゆりは戦争がおわったおかげで、すぐにも父母や兄たちといっしょに暮らせる日がくるだろう……と胸をおどらせて待ちました。しかし、大きい兄の哲は戦争にいったきり、生きてゆりたちのもとにもどってはいませんでした。

父の達夫は、敗戦後自由の身になりましたが、栄養失調と結核でたおれ、入院生活がながびいて、再起もあやぶまれるほどでした。

敗戦のよく年の春、小学五年生になったゆりを、母親の透子夫人が、ようやく野尻へ迎えにきました。

ひさしぶりに透子夫人の見たゆりは、ひよわな都会っ子から、手足のじょうぶそうな田舎育ちの少女にかわっていました。

ゆりと透子夫人が東京へ帰ってゆく日、四人の小人たちのうち、イギリス生まれのバルボーとファーンは、ゆりたちといっしょに帰ることにしました。しかし、日本で生まれたロビンと

アイリスは、姿をかくしてしまつたのです。どうしても忘れることのできない野育ちの小人アマネジャキと、この山おくで暮らすために……。

ながいあいだ、人間や両親に守られて暮らしてきた小人のロビンにとって、この日からほんとうの自由な生活がはじまつたのです。

でも、ロビンの姉のアイリスは、林の中のびのびした暮らしを楽しみながらも、両親のフアーンとバルボーや、そして森山家の人びと——なかでもあのゆりのことを、ときどき思いださずにはいられませんでした。

小人たちの東京時代からの隣人であるハトの弥平は、いまではハトの大家族の主人として、白い羽の妻の多摩と元気に暮らしていました。

アマネジャキのほこらの森のとなりのブナの木の前には、弥平の子どもや孫のハトたちが、飛びまわっていました。

考えぶかいハトの弥平は、ときどき近くの村の田んぼや畑の上を飛んでみては、ながい戦争がおわつたいまも、人間たちやイタチや野ネズミたちの暮らしが、けっして楽になっていないことを感じていました。

ゆりとわかれて一年以上もたつたいま、アマネジャキのほこらの下にあった小人のロビンやアイリスたちの食糧のたくわえが、だいぶ少なくなっているのではないかと、弥平は心配して

いました。

そのうえ田んぼや畑にろくなたべものもないせい、やせおとろえた野ネズミたちのむれが、ときどき弥平たちの林や、アマネジャキのほこらの森のあたりを餌をさがしてちよろちよろはしりまわっているのを、弥平は見のがしませんでした。

——あの野ネズミたちは、おなががすいたとなったら、どこへでもはいりこんでくるぞ。野ネズミたちが、アマネジャキのほこらの地下にある穴倉の食糧をかぎつけるのも、時間のもんだいだろうな……。

弥平は、妻の多摩にこう話しながら、

（もしかしたら、東京のもとの「森山家」の焼けあとに、もうゆりたちの新しい家が建っているかもしれない。そして、アイリスがゆりをなつかしがつているように、ゆりのほうでもアイリスやロビンのゆくえをさがしているのかもしれないぞ。）と考えたのです。

何日も何日も、妻の多摩と相談したあとで、弥平は東京の森山家の焼けあとをたずねて、ゆりのゆくえをさがすことにしました。戦争のあいだ、ゆりがあんなにもたいせつに守っていたロビンやアイリスたちが、平和のもどってきたいまごろになって、この山おくで飢え死にしたり、野ネズミたちにくいころされたりするかもしれない……と考えただけで、弥平はじっとしていられなかったのです。

野ネズミたちにはよく気をつけて……と、ロビンとアマネジャキにいいのこすと、八月のあ
る朝、弥平^{やへい}はむかしじぶんも住んでいたなつかしい東京の空にむかって、まっすぐに飛びたっ
ていったのです。



もくじ



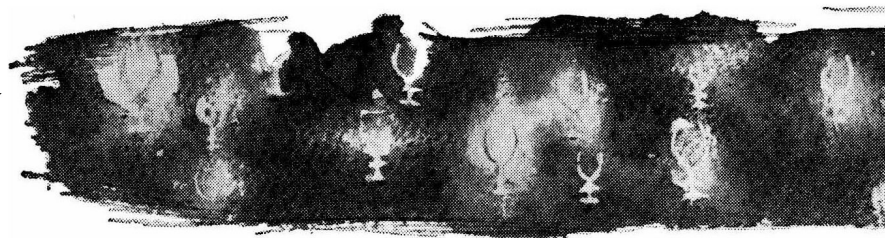


「木かげの家」と小人たち

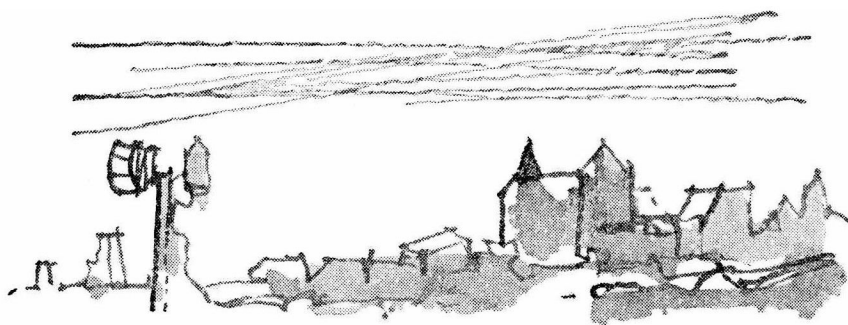
第一部

カボチャの花とヤミ市と	1
野ネズミたちが	11
コップの中の世界	25
追いつめられて	40
もう一つの世界	55
コップを移す	71
くらやみの谷	87
アイリスのしごと	97
黒い沼のほとりで	118
ハトの余平	128
タヤけ空の下へ	144
森山家の人びと	160
七つの星	175

第二部



モモンガーをさがして.....	188
ロビンの冒険.....	209
純とハトたち.....	222
モモンガーのはなし.....	232
余平と純.....	247
ザリガニたちと赤いカニ.....	257
白樺の林へ.....	274
余平、約束をまもる.....	287
再会——そして、わかれ.....	300
いのちの水.....	315
ナウマン象の広場.....	328
たたかいの夜(1).....	342
たたかいの夜(2).....	362
山父の最期.....	374
空いろのコップ.....	387
あとがき.....	



カボチャの花とヤミ市と

弥平は、焼けあとの残っている東京の街の上を、森山家をたずねて飛んでいました。

大きなケヤキの下の「木かげの家」が、二年まえの空襲のとき焼けてなくなってしまったということは、ロビンからきいて知っていたつもりでした。けれど弥平がじっさいじぶんで飛びまわって見たあの「家」のあたりは、思っていた以上の変わりかたでした。

みにくく焼けのこった大ケヤキの残骸のほか、みどりの木立はどこにものこっていません。

きらきら光る八月の太陽に照らされて土にしがみついて建っているようなトタン屋根の家いえと、まっ黄いろな花をつけたカボチャの畑が、ちまちまといくつにも区切られてつづ

いていて、あたりいちめんが、きみょうなほど平らに見えています。このへんのけしきに、むさしのらしいおもむきをそえていたケヤキの木立も、コブシやモクレンの木も、そのかげの西洋館などまじって建っていた、家いえのかわら屋根のつらなりも、ここには少しものこっていません。森山家の人びとは、似ても似つかない見知らぬ男が、いま小さい家の一つから出てきて、うさんくさそうに、トタン屋根の上におりてきた弥平を見あげました。

それから、家のうらの家庭菜園にさいているカボチャの花の一つ一つに、ていねいにべつの花のずいをかぶせて歩きはじめました。

これは戦争以来、信州の山おくの農家でも、たびたび見かけた光景でした。さいた花を一つもむだにしないで、たしかにカボチャにみのらせるために、人びとは朝早くからじぶんの手づくりの菜園で、チョウかハチの役目をつとめているのです。

（ゆりたちの家は、ここにはないのだ！）

弥平は見知らぬ、はだかの男から目をそむけました。まだ、実をむすぶかどうかわからない未来のカボチャを、ハトの弥平から守ろうとするように、その人はやせた肩をいかせていました。弥平じしんも、おなががすききっていました。旅の途中でも東京へついてからも、弥平はたべものらしいものを、ほとんど口にすることができませんでした。

きのう東京へついてまず、弥平は池上にある山の上のお寺へいってみました。もしかしたら、

そこでむかしの友人たちに来て、いろいろようすがわかるかもしれないと思いながら。

けれどそこにも、むかしの「森」はなくて、ハトたちの姿は見えませんでした。ハトたちのねぐらにしていたお寺の本堂が、空襲で——おそらく「木かげの家」と同じころの空襲で——焼けたきり、まだ再建されていなかったのです。

焼けのこった山門下の通りには、にぎやかなヤミ市ができていました。弥平は人目のない小店のうらに、こうばしい大豆かすがたくさんこぼれているのを見つけて、むちゅうでおりていってみました。ところが、ふたくちと、のみこまないうちに、ぱっとだれかにけとばされました。おそろしい顔つきのやせおとろえたハトが、必死で弥平をつきのけようとしていたのです。

——ちくしょう。ひとのものを手を出すな！

——どうか、すこし、わけて……。

弥平は、おとなしくたのもうとしましたが、あいてに二、三度けりつけられると、カッとして飛びかかってゆきました。ものすごい羽ばたきが、道のほりをまきたたせ、あいては、へたへたとたおれかかりました。

——よわむしのくせに、けちなやつだ！

たべものをわけてもらえなかったうらみをこめて、もういちどつかかってゆこうとして、弥平は、はっと身をひきました。

すぐ近くで、二つの目がららんと光っていました。おなかをすかせたやせねこが一びき、じっと待ちかまえているのです、弥平か、あいてのハトかどちらかがたおれるのを……。

弥平の怒りは、やせねこにむけられました。ものすごい羽音と、頭上からの攻撃におどろいて、やせねこはフーッとうなつてにげだしてゆき、弥平ともう一羽のハトは、無言で道の上の大豆かすをついばみました。

さっきまでのもえあがるような憎しみは、大豆かすをわけてたべているうちに、きえていました。が、ほっとするまもなく、あわただしい「食事」はまた中断されました。

竹の棒がびゅーんとふりおろされ、まだ六つか七つくらいの人間の子が、弥平たちを追いはらおうとしていたのです。

—— いっちまえっ！

男の子は、左手でおなかのあたりをぼりぼりとかきながらわめきました。シラミでもたかっていそうなよれよれの白シャツをきていますが、しっかりしたかわいい顔つきの子どもでした。

—— おれのにちゃん、ヤミ屋なんだぞ！ 遠くまで買いだしにいて、そいでうちじゅう養ってんだぞ。それなのに、のらくらしているハトなんかに、店のものくわれてたまるかい！

弥平もやせたハトも、そのけんまくにおどろいて、飛びたとうとしました。

—— やあいサム、おこぼれのすこしくらい、たばさせてやれよ。ハトは、「平和の象徴」ってい

うわけだ。なあに、おとなしそうに見えても、これでも軍用バトのなれのはてかもしれんぞ。

真夏というのに兵隊のきるようなカーキ色の乗馬ズボンをはいた、にいさんらしいわかものが、声をかけました。

——ちえっ、そんなやつ、おれ、つかまえてくってやる！

汗びっしょりの小さな男の子は、本気でハトをつかまえようと、竹の棒をふりまわして打ちかかってきました。

弥平は大豆かすのこうばしいかおりに気をひかれながらも、大いそぎでにげだすほかなかったのです……。

*

カボチャの花を手にした男は、ハトの弥平がまだそこにいるのに気がつく、うさんくさそうに弥平を見あげました。

（これではもう、野尻へ帰るよりほかはないな。この交わりはてた東京じゅうを、あと何日かんばってさがしてみても、ゆりたちにめぐりあえる機会は、おそろくあるまい……。）

こう考えると弥平は、石でもぶつけてきそうなその男からにげだすように、熱いトタン屋根から空へ飛びたちました。

弥平がこの焼けあとでゆりたちと再会することをあきらめたのは、正しかったのです。このこ